

## 6 坪井信道賛―

### 川原慶賀のヒポクラテス画像

和田 和代史

江戸時代の漢方医は、神農・黄帝を毎年冬至の日に祭るのが習わしであった。杉田玄白らの「解体新書」の刊行がきっかけで、蘭学を学んだ蘭方医達が、西洋医学の祖先に当たる人物として、ヒポクラテスを捜し求めた。

新資料として坪井信道の賛詩による川原慶賀筆「ヒポクラテス像」に関して報告する。坪井信道（二七九五―一八四八）は、医祖ヒポクラテスを称えた雄大な五言律一篇を作っている。緒方富雄の「日本におけるヒポクラテス賛美」によると作詞者自身が書いた七点が現存している。

（昭四六年出版）

資料一 茅原元一郎氏蔵（画像なし）

二 坪井誠太郎氏蔵（画像なし）

三 青木一郎氏蔵（画像なし）

四 早稲田大学図書館蔵（画像なし）

五 坪井環氏蔵（伝小田野直武画像）

六 天保一二年（石川大浪筆画像）

七 武田薬品工業蔵（大原国延筆画像、天保一四年）

西方有美人 鶴髪皓如銀 雙眼睨寰宇

方言驚鬼神 高天仁不極 大海知無垠

赫々吾医祖 光輝照万春 医祖賛

晩生坪井信道衙拜書

茅原元一郎氏蔵の添書から、作詩は、天保一〇年（一八三九）作と考えられる。

本演題の賛詩は、登与助（慶賀の通称）のサインと共に長崎 一八四〇四と書かれていることから一八四〇年四月に製作されたと推論できる。賛詩の辞句に関して、緒方によると七点の資料のうち全く一致するのは、資料一と資料六（数本）の二点だけで、本資料との辞句では皓↓咬・無↓難のみで、自筆の七点の資料を考察すれば大同小異である。

信道自筆の七点間の異同表をもとに新資料として八点の表を示し若干の文献的考察を加え、問題提起したい。

慶賀のヒポクラテス画像と同じ画幅が大分県杵築市の佐野家に有り、賛詞は、長崎の通詞吉雄権之助（一七八五—一八三二）が蘭文の賛を書き、日出藩の儒者・蘭学医帆足万里が権之助の蘭文の大意を漢文で書いて題言としたものである。慶賀は、一七八七年天明六生、没年は不明、通称登与助、字は種美、号慶賀、聴月桜主人と称した。

慶賀は、父香山に絵を学び、石崎融思にも師事した。

出島絵師といい、文化年間後半頃からオランダ商館に入りを許された画家である。文政六年（一八一三）オランダ商館医として来日したシーボルトに画才を見出され、彼の日本研究に協力して、多数のしかも多種類の画を描いた。シーボルトが文政八年（一八二五年）にジャワから呼び寄せた助手の一人フィレニューエから西洋画法を学び、多量の植物・動物などの写生図、風俗習慣図などを画いたが、実写作品は和洋折衷体で、没個性的な資料としては異質である。慶賀のヒポクラテス画像は紀元前四〇〇年前後のギリシャ人の服装とは全く違い襟のまわりのコロレット風のものは、一七世紀の外科の祖であるパレであると考察する。当時松浦藩にパレの原書があり、

パレの肖像をモデルに描いたと推論できる。シーボルト事件のとき慶賀も罪に問われ、天保一三年（一八四二）に国禁に触れ長崎から追放され、嘉永初年に長崎に戻ったが、その後は消息不明である。

今回は、坪井信道の自筆の賛詩と、数奇な運命の画家慶賀について報告する。

（和田医学史料館）